

「楽しそうな声が向こうまで聞こえましたけど、どうしたんですか？」

声が聞こえてきた方へと近藤と千鶴の顔が向けられる。

そこには道着を身に纏った総司の姿があった。緩められている襟元から覗く胸元に汗が滲んでいる。たった今まで稽古をしていたのだろう。

「おお、総司。ん．．．ずっと稽古していたのか？」

「はい。精神を集中させたくて竹刀を振っていたらつい熱中しちゃいました」

「ほう、精神統一か。感心、感心。だが、早く着替えないと遅刻するんじゃないのか」

「もう、そんな時間ですか。すぐにシャワー浴びて着替えてきます。．．．そう

いえばなんの話をしていたんですか？『お嫁』がどうの、とか聞こえた気がするんですけど」

「ああ。千鶴くんはいいお嫁さんになるな、と話していたんだ。兄の目から見てもそうは思わんか、総司」

「．．．．．そうですね。凄く出来たお嫁さんですよ、千鶴．．．ちゃんは」

総司は一瞬だけ何ともいえない表情をしたが、それを直ぐに隠すかのように微笑みを浮かべた。

「そうか、総司もそう思うか」

「はい、もちろんです」

「総ちゃんまで!!」

「そんなに恥ずかしがなくてもいいんじゃない？本当のことなんだからさ。その制服の上に付けてる白いレースのエプロンも千鶴ちゃんに似合ってるよ」

「に……って！総ちゃんはいつもそんな風に私をからかうし、恥ずかしいに決まってるでしょ！もう、総ちゃんのバカバカ……!!」

そう言いながら、千鶴はせめてもの抗議と、総司の腕をポカポカと叩く。だが、千鶴の力では痛くもなるともないのだろう、総司は千鶴を見下ろしながら笑い声をあげている。

そんな二人の様子を微笑ましく感じながら近藤が優しい眼差しで二人を見守っている。

「本当にお前たち兄妹は仲がいいな」

総司と千鶴の動きがヒタリと止まり、近藤へ視線を向けると、その言葉へと耳を傾ける。

「天国にいる君らの両親も安心して居るだろう」

「近藤さん……」

「総司、千鶴くん——すまん。本来なら俺も一緒に沖田の……君たちの両親の墓参りに行きたかったんだが……」

出張で行けなくなってしまったと、申し訳なさそうに目を伏せる近藤に総司と千鶴はそつと首を横に振る。

「そんなことないです。近藤さんがお忙しいのは分かっています。こうして私たちを引き取ってくださっただけでも感謝しているんですから」

「そうですよ。両親を亡くして身よりをなくした僕たちを、父さんの友人だった近藤さんが引き取ってくれた。——僕たちも両親も近藤さんには感謝しています」

「総司、千鶴くん……ありがとう」

「それは僕たちのセリフですよ」

「ありがとうございます、近藤さん」

「総司っ、千鶴くんっ!!」

感動に涙しながら近藤は二人を強く抱きしめた。

「あはは……近藤さん、苦しいですってば」

「おおっ!! すまん、すまん」

総司の言葉にパツと腕を離すと、近藤は照れ笑いしながら頬をポリポリと掻いた。